

言語類型論から見た日本語のモダリティ体系

玉地瑞穂 (高松大学) 堀江薫 (東北大学)

tamaji@takamatsu-u.ac.jp

khorie@mail.tains.tohoku.ac.jp

1. はじめに

第二言語の文法形式の習得において、学習者は文法形式の意味・機能と形式を一致させながら習得したその過程において自分の母語の文法形式との対照を基盤としていられるとされている(Larsen-Freeman and Long 1991)。したがって、第一言語と第二言語の文法形式が似ているものは習得しやすいが、そうでないものは習得が難しいことが予想される。

中国人留学生の日本語学習上の困難な点の一つに、日本語のモダリティ形式「ハズダ」と「ベキダ」の使い分けがある。この両形式の使い分けが難しい理由の一つに、「ハズダ」「ベキダ」は中国語ではいずれも「應該」(ying gai)という単一の形式に対応することが挙げられる。これと類似した対比は、英語の法助動詞 should との間にも見られる。

このように、中国語や英語などのモダリティ体系においては義務など deontic (行為遂行的な)モダリティの意味から epistemic(認識的な)モダリティの意味が派生したと考えられており、同一の助動詞が deontic と epistemic を意味する場合が多い(Palmer 2001)。また、実際の使用においても deontic の用法が中核であり、epistemic の用法は周辺的であるとされている(Li 2003)。

一方日本語においては、epistemic のモダリティの方が deontic のモダリティより発達しており、それぞれ別の形式によって表現されるという違いがあり、学習者にとって使い分けが難しい(守屋、堀江 2004)。

本研究では、第二言語としての日本語のモダリティ形式の習得研究の基盤として、言語類型

論の観点から日本語のモダリティの形式と機能の対応関係の分類を試みる。本研究の構成は、以下の通りである。2 節では、類型論的なモダリティ研究である van der Auwera and Plugian (1998)の理論的枠組みを概観する。3 節では、この枠組みに基づいた日本語のモダリティ体系の分類を示す。4 節、5 節ではそれぞれ考察、結論を述べる。

2. van der Auwera and Plugian(1998)による言語類型論的モダリティの研究

van der Auwera and Plugian(1998)は、モダリティという概念を「可能性と必然性を2つの選択的変異形として含む意味領域」(p.80)を示すものとして提唱した。彼らは、モダリティを 'participant-internal modality', 'participant-external modality', 'deontic modality', 'epistemic modality' の4つに分類し、それぞれのグループの中で可能性と必然性のグループが対立すると考える。

Participant-internal modality は、「ある事柄に従事している参加者の内部的可能性や必然性について言及する」ものである (p.80)。この領域は、「参加者の能力、参加者の内的要求にかかわる必然性」を表す。

Participant-external modality は、「ある事柄に従事している参加者の外部にある状況やその状態の実現が可能あるいは必然にする状況」について言及する (p. 80)。

Deontic modality は、「参加者にあることを可能にさせたり強制したりする外部にいる人物(しばしば話者である)そして、あるいは参加者がある事柄に従事することを許可したり義務

付けたりする社会的・倫理規範」である。これは、participant-external modality の下位領域あるいは特別な場合をあらわす (p. 81)。Deontic の領域において、許可は可能性、義務は必然性を意味する。

第4のカテゴリーは話者の判断を表す Epistemic modality である。Epistemic の領域において対立する可能性と必然性はそれぞれ、不確実性と妥当性であると考えられる。

図1は、van der Auwera and Plugian(1998)のモダリティの類型を示したものである。

3. 日本語のモダリティ体系の類型

本節では van der Auwera and Plugian の提案したモダリティの分類に基づいて、日本語のモダリティ体系の分類を提示する。

日本語のモダリティ研究においては、階層的モダリティ論、叙法論的モダリティ論などがある。階層的モダリティ論の中で、中右(1994)は発話時現在の話し手の心的態度という意味上の規定にかなうものを表現形式の範疇にかかわらず網羅しようとしている。これに対して、仁田(1991)・益岡(2000)らは、比較的文法化の進んだ部分に焦点を当てているので、対象とするモダリティの範囲がより限定されている。

叙法論的モダリティ論(尾上 2001)は、モダリティをテンス・アスペクトなどの述語との関係を考えながら、叙法の組織として、それらを統一的に理解していくという方法がとられる。しかし、これらの理論では日本語のモダリティの意味・機能と形式を十分統一的に説明できていない。

これらに対して、宮崎他(2002)のモダリティ論は、モダリティとは文の伝達的なタイプと密接に関係する概念であると考え、モダリティをモーダルな意味とそれを表現する文法形式の関係の体系であると考えている。本節では、まず宮崎らによる日本語のモダリティ体系を概観し、その後それらを van der Auwera and Plugian(1998)の理論に基づいて類型化する。

宮崎他(p.14)は日本語のモダリティ体系を「実行」と「叙述」の対立であるという見方を取り、「実行」に意思・勧誘、命令・依頼、「叙述」に評価、認識という下位範疇があると記述している。意思・勧誘のモダリティ形式として「～う」「～よう」「～たい」などを挙げている。命令・依頼のモダリティ形式には、命令を表す「～しろ」、依頼を表す「～てくれ」、勧めを表す「～たらどうか」「～といい」、禁止を表す「～てはいけない」等が含まれる。評価のモダリティ形式には「～といい」「ほうがいい」「べきだ」「ものだ」等がある。認識のモダリティ形式には「かもしれない」「はずだ」「らしい」「ようだ」等が含まれる。

これらの4つのカテゴリーを、van der Auwera and Plugian の類型に従って分類するとそれぞれ、意思・勧誘のモダリティは participant-internal modality、命令・依頼のモダリティは participant-external modality、評価のモダリティは deontic modality、認識のモダリティは epistemic modality に対応する。

日本語における epistemic modality は、伝統的に「判断のモダリティ」を表す形式として、判断の確かさ(蓋然性)を表す形式と証拠に基づく判断を表す形式に二分する考え方がある。それによると、前者の中には可能性を表す「かもしれない」、必然性を表す「にちがいない」「にきまっている」「はずだ」が含まれ、後者の証拠性を表すものには「らしい」「ようだ」「みたいだ」「そうだ」が含まれる。証拠性は van der Auwera and Plugian の類型には含まれていないので、ここでは考慮しないこととする。

次に、これらのモダリティの形式の分布に注目してみる。participant-internal modality(「～う」「～よう」「～たい」など)と participant-external modality のうち、命令、依頼を表す(「～しろ」「～てくれ」など)ものは動詞活用の一部で表されている。Participant-external modality のうち、勧め、禁止を表す(「～といい」「～てはいけない」など)ものと deontic modality の一部(「～

といい」「ほうがいい」など)は、「評価的複合形式」(p. 83)で表されている。「評価的複合形式」とは、条件節の接続形式(「～ば」「～と」など)と評価を表す述語(「いい」「いけない」)から成り立っており、内部の構成要素の独立度が高い、つまり全般的に文法化の度合いが低い形式である(p. 85)。Deontic modalityのうち「べきだ」「ものだ」などは助動詞である。Epistemic modalityを表すものは「助動詞相当形式」(p. 145)である。

これらの結果をまとめた図2は、日本語のモダリティ体系の意味・機能と形式の相関関係を示している。

4. 考察

van der Auwera and Plugian (1998)によれば、participant-internal modality > participant-external modality > deontic modality > epistemic modalityの順に発達してきたというが、この仮説は日本語のモダリティ体系に当てはまるだろうか。モダリティのカテゴリー(意味・機能)と形式との相関関係から日本語のモダリティ体系を分析してみる。

まず、動詞活用形の一部が participant-internal modality を表すということは、モダリティの中核であるムードの語形が活用という動詞の語形変化の体系の中に組み込まれているため、このモダリティが最も基本的なものであるといえる。動詞活用形(「～しる」「～てくれ」)は participant-external modality の中にも見られる。また動詞活用形のもの(命令・依頼のモダリティ)は、「評価的複合形式」のもの(勧め・禁止のモダリティ)より、基本的なモダリティである。これらのことから、日本語のモダリティ体系の発展順序についても、participant-internal modality > participant-external modality という歴史的発達順序が見られると言えるのではないかと考えられる。そして、participant-external modality の中でも動詞活用形のものが「評価的複合形式」によって表されるものよりも先に発

達したのではないかと推測される。

「評価的複合形式」が participant-external modality と deontic modality の両方のモダリティとして機能するという点についても、participant-external modality > deontic modality という発達順序を示し、deontic modality が participant-external modality の下位領域あるいは特別な場合をあらわすということについては、van der Auwera and Plugian の理論と一致している。しかし、日本語の deontic modality の中には、助動詞(例:「べきだ」)のように deontic modality としてだけ機能するものがあることは、日本語のモダリティの特徴的な点であると思われる。

日本語の epistemic modality が「助動詞相当形式」によって表されるということについては、助動詞との比較から説明してみる。助動詞と助動詞相当形式との違いについては、前に接続する品詞が異なることが挙げられる。助動詞の前は動詞の原形に限られ、否定や過去を表すときは、「べきだった」「べきではない」というように助動詞自体が変化をする。一方助動詞相当形式の場合、動詞に限らず形容詞、名詞も接続でき、「～しないはずだ」「～したはずだ」というように、否定形や過去形が接続することもできる。したがって、日本語のモダリティにおいて、epistemic modality の用法は deontic modality の用法と競合せず、モダリティの発展の順序も deontic > epistemic ではなく、deontic/epistemic であると言えよう。この点において、本研究において、最近の日本語学におけるモダリティ研究の見解を、意味・機能と形式との相関関係からも確認できたと言えることができる。

5. 終わりに

以上、言語類型論の観点から日本語のモダリティを分析することによって、意味・機能と形式との相関関係が統一的に説明できることが分かった。今後は、この分類が外国人学習者の日本語のモダリティ習得にどのように有効であるかを検証していきたい。

参考文献（関連の深いもののみ）

Larsen-Freeman, D. and Long, M.H. 1991, *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. Longman.

Li, R. 2003. *Modality in English and Chinese A Typological Perspective*. Lighting Source Inc.

Palmer, F. R. 2001. *Mood and Modality*. 2nd edition. Cambridge University Press.

van der Auwera, J. & Plugian, V. 1998. Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2: 79-124.

宮崎和人他. 2002. 『モダリティ』くろしお出版

守屋哲治・堀江 薫 2004. 「日英語のモダリティ体系に見られる意味変化の方向性の違い」『言語処理学会第 10 回年次大会論文集』185-88.

図1 van der Auwera and Plugian(1998)によるモダリティの種類

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic Possibility (Uncertainty)
Participant -internal Possibility (Dynamic, Ability, Capacity)	Participant-external possibility		
	Non-deontic Possibility	Deontic possibility (Permiss-ion)	
Participant -internal Necessity (Need)	Non -deontic Necessity	Deontic necessity (Obligat-ion)	Epistemic Necessity (Probability)
	Participant-external necessity		
Non-epistemic necessity			Necessity
Necessity			

図2 van der Auwera and Plugian(1998)の種類に基づく日本語モダリティ体系の分類

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic Possibility (可能性) <u>~かもしれな</u> <u>い</u>
Participant -internal Possibility	Participant-external possibility		
	Non -deontic Possibility <u>~てもい</u> <u>い</u>	Deontic possibility (許容) <u>~てもい</u> <u>い</u>	
Participant -internal Necessity <u>~う、~よ</u> <u>う、~たい</u>	Non -deontic Necessity <u>~しろ</u> <u>~てくれ</u> <u>~てはい</u> <u>けない</u>	Deontic necessity (必要妥当) <u>~ほうがい</u> <u>い</u> <u>~なければ</u> <u>い</u> <u>ならない</u> べきだ ものだ	Epistemic Necessity (必然性) <u>~にちがいな</u> <u>い</u> <u>~にきまって</u> <u>いる</u> <u>はずだ</u>
	Participant-external necessity		
Non-epistemic necessity			
Necessity			

常体：動詞活用形の一部
 イタリック体：評価的複合形式
 太字：助動詞
 下線：助動詞相当形式